

論壇

国際基督教
大学教授

森本あんり



体制の違いを超えて
共に歌うこと

「世界の望みなるキリスト」は、1954年にイリノイ州エヴァンストンで開かれた第2回世界教会協議会の標語である。時代は、東西の冷戦による軍備拡大と核兵器開発競争のさなかにあった。このよ

を語り、何を証しすべきか。それがこの協議会の主題であった。

しかし、協議会はこの主題を、ただ集まって議論するだけでなく、声を合わせて共に歌うことを願った。世界のキリスト者が、東も西も、南も北も、体制の違いを超えて共に歌うならば、お互いの心をいっそう深く結び合わせて時

代の課題に向き合うことができると思われたからである。そこで協議会は、この主題に

ふさわしい歌を公募し、全世界から寄せられた500あまりの中から、「世界の望みなる主よ」(『讚美歌21』473番)を選び出したのである。

歌詞を見ると、それがどんな時代であったのかがよくわかる。「世界の望みなる主よ、

争いに悩みつつ、虚しき望みを生かしていない)。にすがる、世の民を救いませ」。冷戦体制の中で、争いに悩み、軍備や核ミサイルという「虚しい望み」にすがる人々に、「まことの望みなるキ

を生かしていない。

アメリカ初の
女性神学教授の願い

作詞者は、ジョージア・ハークネスという神学者で、名

に、按手を受けてメソジスト教会の牧師となり、アメリカ初の女性神学教授となって、ギャレット神学校や太平洋洋神学校などで教えたのである。詩人として、学者として、牧

世界の望みなるキリスト

「世界の望みなるキリスト」を指し示す、という前から明らかかなように女性である。ハークネスは、コーネル大、ボストン大、ハーヴァード大、イェール大で学び、博士号を取得した。戦前のアメリカで、それだけでも特筆すべきであるが、彼女はさら

師として、教授として、これほど優れた才能を合わせもつた女性も少ないであろう。実は、このエヴァンストン会議の2年後、1956年にハークネスは来日している。国際基督教大学(ICU)で

教えるためである。ICUにエーミル・ブルンナーが来たことはよく知られているが、その後任として来た彼女のことはあまり知られていない。翌57年にICUは第1回の卒業式を執り行ったが、そこで式辞を述べたのが彼女である。

徹底した平和主義者であったハークネスは、後に国務長官となるジョン・フォスター・ダレスらと共に、第二次大戦の終了前から「国際連合」の創設を論ずる委員会でも活動していた。戦後の世界秩序に重大な関心を抱いていた彼女であるから、このような賛

美歌を作ったことと、日本の小さな無名の大学に赴任したこととの間には、世界の平和と和解に尽くすという共通の願いがあったように思われる。

2008年の今日、われわれはもはや冷戦体制の中には住んではいけない。しかし、「争いに悩み、虚しき望みにすがる」という現実は、なおわれわれを虜にしたままである。新しい年も、われわれはパウロと共に言わねばならない。「わたしたちは、このような希望によって救われているのです」(ローマ8・24)。

(もりもと・あんり)